

殷周時代における長江中流域の青銅器文化の形成と展開

譚, 永超

<https://hdl.handle.net/2324/4784370>

出版情報：九州大学, 2021, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	譚 永超			
論文名	殷周時代における長江中流域の青銅器文化の形成と展開			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	宮本 一夫
	副査	九州大学	准教授	辻田 淳一郎
	副査	九州大学	教授	遠城 明雄
	副査	九州大学	教授	森平 雅彦

論文審査の結果の要旨

上記の論文では、殷周時代の長江中流域という殷周社会の周辺域でみられる独自の青銅器文化の始まりから終焉に至る過程を、殷王朝や周王朝との関係の変化を踏まえながら、明らかにしたものである。また、属性分析の手法を用いながら、その青銅器文化の体系的で詳細な青銅器編年を明らかにしただけではなく、青銅器の埋納行為や墓への副葬行為の分析を行いながら、地域社会の社会進化の過程とともに、青銅器文化の変化の歴史的解釈に至っている。その歴史的解釈は、これまで当該期の長江中流域が殷周社会の周辺域として位置づけられてきたものについて、独自の青銅器文化の生成を示す地域社会であることを明らかにしたことが、秀逸な点として評価できる。また、そうした独自の青銅器文化が、楚国などの周王朝社会に編入される過程を明らかにし、地域の独自の青銅器文化の終焉を歴史的な文脈で解釈している。

第1章は、まず長江中流域の青銅器の特殊性やその評価に関して研究史をまとめる。当該地域の個々の青銅器の内容を、それら青銅器の型式分類と編年を中心に研究史をまとめ、その問題点を析出する。そして、本地域の青銅器文化研究の方法論を吟味し、属性分析によって編年を構築することを示し、本地域の青銅器文化の特殊性を明らかにする学史的意義を述べる。

第2章では、殷代における本地域の青銅尊や壘の特殊性を中原のそれらとの比較から示すとともに、属性分析によって型式編年を示し、時間軸を明らかにする。また、大型化や文様の特殊性から地方生産のあり方を明らかにする。さらに時間軸に基づく青銅器型式の分布論から、青銅尊・壘の長江中流域での地域生産のあり方を示していく。

第3章では、殷代の中原に生まれた小型青銅鏡の編年を示すとともに、その小型鏡をもとに、長江中流域で独自に生産が始まった大型鏡を、文様や形態などの属性変化の組み合わせによる属性分析によって、精緻な編年を明らかにするとともに、殷王朝の中原青銅器との比較から実年代を定めている。

長江中流域の大型鏡と中原の小型鏡が融合する形で、西周前期に楽器である青銅甬鐘が成立する。第4章では、この青銅甬鐘の長江中流域での型式変化を示すことにより、西周前期に周王朝で生産され始めた青銅甬鐘が、長江中流域で湘江流域を中心に在地生産される過程を明らかにする。さらにそれが長江中流域の他地域に拡散していくことを述べる。

第5章では、同じく西周前期に周王朝からもたらされた中原青銅器の鼎が、長江中流域で地方生産されていく過程を、型式分類と型式編年の構築によって明らかにする。これにより、西周に始まる在地生産の過程を、長江下流域の青銅鼎を含めて検討する。さらに、春秋後期から戦国前期における楚文化の影響の中で、青銅器生産が終焉していく過程を明らかにした。

第6章では、殷代の青銅尊・壘、殷代から西周の大型鏡、西周～春秋前期の青銅甬鐘の埋納状況を検討することにより、社会集団の青銅器保有の意味を検討する。一方、西周～戦国前期の鼎は、墓への副葬品として利用されており、葬送分析から集団墓や特定個人墓への鼎の副葬の意味と社会の階層化との関係から、社会進化のあり方を解釈する。一方、春秋後期～戦国初期にかけて、周王朝の楚国の地域支配を受けていく過程を明らかにする。

第7章では、このように明らかにされた青銅器の変遷と地域生産のあり方、さらには埋納や副葬にみられる青銅器の社会的な意味を、5段階に分けながら論ずる。また、本地域固有の社会進化のあり方と殷王朝や周王朝との関係性の変化を述べる。

結語では、長江中流域の青銅器文化を段階的にまとめるとともに、青銅器を受容した東アジア他地域との比較から、本地域の青銅器文化を評価する。

このように、殷周社会の周辺域である長江中流域を、一貫して独自の青銅器文化として位置づけ、歴史的な叙述を試みようとした初めての体系的な論攷であるところに、本博士論文の意義がある。

以上から、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認めるものである。